

女性的な作品と女性作者との結びつきについて

—— 〈女歌〉の含意 ——

松田 康介

構築主義の考え方によれば、性差によることばの違いは「暗示的、明示的に教えられる中で『そのようなことばづかいを身に着けていく』（村田 2022：292）と説明される。人々が自身の性別に応じてジェンダー化されたことばを不断に習得していくと考えるのなら、そもそもある人間に割り当てられる属性としてのジェンダーと、その人間の生産することばに見出されるジェンダーとはどのような関係性のもとで接続されるのだろうか。本研究では日本の伝統的定型詩である短歌に着目し、女性的な作品と女性作者との結びつきをめぐる問題について考察する。具体的には、〈女歌〉という用語が使用されるときその語に歌人たちが託す主体観の分析を行う。

〈女歌〉とは、女性の歌といったような意味を広く持つ語である。女性歌人の阿木津英によれば、〈女歌〉という呼び方は折口信夫によって使われ始めた戦後から一般的に通用するようになったが、「歌壇ではその定義をめぐる幾たびも議論が起り、ときに紛糾混乱した」（阿木津 2011：76）という。ここで試みたいのは、歌人たちによる〈女歌〉なる「概念」の使用法の分析である。「人々が行為や行為者を分節化して理解」（小宮 2017：140）するために必要とする概念を言説から取り出し記述することで、その概念を取り巻く知識のあり方を確認することができる。たとえば『女歌の百年』（道浦 2002）という著作では、「やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」（与謝野晶子）から『この味がいいね』と君が言ったから七月六日はサラダ記念日』（俵万智）まで様々な女性歌人による作品が〈女歌〉の実例として紹介されているが、それらの取り上げられ方をみれば、ここで言う〈女歌〉は女性による女性的な恋の歌を指していることがわかる。つまり、女性的な

作品と女性作者とは「恋愛」を媒介として象徴的に結びついており、〈女歌〉のアイデアはその結びつきを保持するようにして持ち出されているのである。

このような形での分析をより広く通時的に行うために、以下では雑誌記事を中心に歌人たちのジェンダー言説が確認できる文献資料を用いることにする。本研究が主に対象とするのは、戦後から2023年現在までの間に雑誌『短歌』・『短歌研究』に掲載された、女性と短歌との関わりについての言及がみられる記事である。このような条件に合う記事全てについて論じることは困難であるので、CiNii Research を用いて「女歌」・「女性」・「女流」をタイトルまたは抄録に含む記事を検索し、〈女歌〉の含意を探るという研究目的に合うものを抽出した。記事数や論調の変化など全体的な傾向を確認したうえでいくつかの特徴的な例を取り上げ、〈女歌〉概念の取り扱われ方およびその背景となる文脈を示す。

〈女歌〉に関する記事は、70年代から90年代にかけて頻繁に掲載されていた。戦後すぐから90年代までは男性の手になる文章が女性のものよりも多く、〈女歌〉をめぐる議論には男性歌人側からの意見が大きく反映されていた。例として、「女流はとかく冷い歌を作りたがるが、そういう一面だけでは女歌こんにちの（ママ）興隆もいつか衰退しないと誰が保証出来るだろう」（木村 1958：35）という文からは、男性の期待する女性像から外れた歌を詠む女性歌人への非難が読み取られる。女性的な作品と女性作者との繋がりを前提とした男性歌人による〈女歌〉論が積み重ねられていくが、80年代には「かつての『女歌』は女流だけのものではなく、広く男性歌人の中にも浸透しつつあるように思える」（島田 1983：141）というように、〈女歌〉が帯びているとされる女らしい作風を女性歌人から引き離す論もいくつか現れている。こうした「引き離し」の態度は、女性歌人側からは同時期までに既にレッテルの忌避という形で示されていた。女性歌人35名へのアンケートを実施した『短歌研究』1962年1月号の特集では、編集部からの「『女歌』という分類をどう考えますか。」という設問にほとんどの回答者が否定的な反応を返していた。一方で〈女歌〉の戦略的な使用という道を探る女性歌人も存在し、馬場あき子は「女歌のゆくえ」（馬場 1971）において、男社会に伍する作品として〈女歌〉を詠む／読むことの提言を行った。先に文章を引用した阿木津英

は、文体論への傾斜という点で馬場を批判しつつも、折口の言う〈女歌〉を「人々の生活の中から生まれてきた文化の問題、男の文化に対抗する、女から女に伝えられてきた女の文化というもの」(阿木津 2003: 27)を捉えたことばとして再評価している。生理的・生物学的ではなく、社会的な〈女歌〉の認識である。

〈女歌〉概念は論者によって様々な仕方では使われていた。それらの差異は、女性性を作品自体、作者、背後にある環境……のどの位相に見出すのかとパラレルな関係にある。

[引用文献]

- 阿木津英 (2003) 「提言① 折口信夫論のはらむ問題」阿木津英編著『短歌のジェンダー』本阿弥書店, 16-35.
- (2011) 『二十世紀短歌と女の歌』學藝書林.
- 馬場あき子 (1971) 「女歌のゆくえ」『短歌』18 (3): 109-15.
- 木村捨録 (1958) 「女歌とその作者達」『短歌研究』15 (3): 30-5.
- 小宮友根 (2017) 「構築主義と概念分析の社会学」『社会学評論』68 (1): 134-49.
- 日本短歌社 (1962) 「女流歌人の一面を知るために」『短歌研究』19 (3): 120-5.
- 道浦母都子 (2002) 『女歌の百年』岩波書店.
- 村田泰美 (2022) 「第17章 言語とイデオロギー」.
- 岩田祐子・重光由加・村田泰美編『社会言語学——基本からディスコース分析まで』ひつじ書房, 299-312. 島田修二 (1983) 「女流短歌の軌跡」『短歌』30 (9): 136-41.

(まつだ こうすけ・京都大学大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員)